

国分信著『研究情報と図書館——知的生産におけるニュー・メディア』

東京 丸善 1986.2 284p.

飯 田 賢 一*

めまぐるしく進展しつつある今日の情報化社会の中で、それを支える情報インフラストラクチャの一つのかなめともいふべき図書館は、いったいどのような状況にあり、また環境変化にどう対応すればよいのか？ 本書は、このような問いに対し、たんなる図書館情報学の立場にとどまらず、研究者・利用者側の視点をもふまえ、大へん丁寧に、かつ総合的に答えてくれる、まことにユニークな労作である。

慶応大学で図書館学を専攻された国分氏は、短大・大学の図書館司書や金融経済研究所の研究員をへて、昭和37年から日本開発銀行の中央資料室の企画運営や「産業経済雑誌主要記事索引」の編集などにたずさわリ、また同行の調査マンとしても活動され、かわら専門図書館協議会や日本図書館協会の委員として『専門図書館のスタッフマニュアル』などを作成する、というように、本書の対象とする分野ではひじょうに豊かな体験をもつ得がたい

人材である。それ故に氏は次のように考えた。——「図書館は利用者のために存在し、その充実・発展は設置当局の理解、利用者による利用の活性化、ならびに図書館関係者の意欲と努力にまつところが大きい。」とすれば、「最近ニュー・メディアを装備してイメージを一新しつつある図書館状況を、上記3者のために1冊で鳥瞰しうる図書が必要ではないか。」（あとがき）

これが本書執筆の動機である。全体は合計12章および資料編（図書館関係法規・海外情報源一覧など）から成る。まず第1章で「都市と大学と図書館」のかかわりが、国際比較の視角をまじえながら述べられ、第2章ではこれをうけ、文献データベースの成立にいたる世界と日本の「図書館史挿話」が簡潔に展開される。ここまではいわば導入部であるが、以下第3章「図書館の機能分担」、第4章「研究者から見たわが国大学図書館の問題点」、第5章「研究情報源としての図書館」、第6

* いいだ けんいち 東京工業大学工学部教授（前『専門情報機関総覧』編集委員長）

章「図書館におけるレファレンス・サービス」、第7章「図書館の電算化」、第8章「各国国立図書館のMARC」、第9章「書誌ユーティリティの活動」、第10章「学術情報システムと大学図書館」、第11章「文献データベースの開発と導入の状況」とすすみ、第12章「図書館を取り巻く環境変化への対応」で結ばれている。

なかなか見事な構成であり、著者は図書館学の新しいテキストを意図しているようである。けれども各章を通じ、「そもそも図書館は利用者のために存在する」（はしがき）という著者の姿勢が貫かれていることが、この本の価値をいっそう高いものにしている。すでに30有余年の歴史をもつ「経済学文献季報」の共同編集に対しても、第11章その他で的確な目くばりがなされている。

国分氏によると、わが国における図書館利用は、館種によって異なり、初期（幼児期）、発展期（青少年期）、利用定着期（成人期）といった諸相をもち、その構造は重量的、重層的であって、幅がある。しかし「優れた研究者が利用するところであればあるほど、情報・資料の網羅性、適及性が求められ、さらに適時、的確な提供が要請されている」という（第12章）。

ところで驚いたことに、図書館の大

切な要素として、「図書館利用者」が、それまでの日本における図書館の三要素、すなわち「資料・職員・施設」に加えられたのは、昭和52年刊の『図書館ハンドブック・第4版』からである、と指摘されている（第3章）。そして、こうした後進性が、国分氏の強調するように、今日ようやくレファレンス・サービス、電算化、MARC、文献データベース、学術情報システムなど、研究情報提供システム革新を軸として打開されようとしているわけである。

そこで小著『風土と技術と文化』その他で図書館論に言及したこともある評者は、氏の「挿話」にならいつのこを付記して短評を結ぶことにしたい。——あの発明王エジソンが列車の新聞少年であった1850年代後半のころ、かれの活躍の拠点地の一つ、デトロイト市にはもう働く民衆たちのための公開図書館があり、エジソンらは温かく迎え入れられた。また、日本の公共図書館総数はいま約1,500であるが、これは1919年に亡くなったカーネギーが一代でつくり上げた合衆国内外の図書館総数約2,800に、はるかに及ばない。

情報技術革新の進展する現代であるが、本書を機に、評者はあらためて「図書館は人類の魂の宝庫」と唱えた図書館人・科学者、ライプニッツの精神をかみしめたいものと思う。